

かぐらおか

第 92 号

平成 9 年 10 月 15 日

編集 旭川医科大学
厚生補導委員会
発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は初代学長 山田守英氏)



(写真撮影 医学部附属実験実習機器センター 千葉 伸一)

あきぞら

| | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 退官にあたって……………清水 哲也… 2 | 講師紹介……………11 |
| 学長に就任して……………久保 良彦… 3 | 第44回北海道地区大学体育大会……………12 |
| 副学長(附属病院長)就任にあたって……………牧野 勲… 4 | 第40回東日本医科学生総合体育大会(夏季部門)……………12 |
| 教授就任の挨拶……………木山 博資… 5 | 体育大会実施される……………12 |
| 教授就任にあたって……………松野 丈夫… 6 | 研究室紹介 放射性同位元素研究施設……………13 |
| 教授就任にあたって……………望月 吉勝… 7 | 外国人留学生オリエンテーション及び交流会実施される……………13 |
| 三つの転機(就任にあたって)……………松原 和夫… 8 | 学生教育研究災害傷害保険の加入について……………13 |
| 旭川医科大学に入学して……………阿部 展子… 9 | 訃報……………14 |
| 旭川医科大学に入学して……………佐々木亜妃… 9 | 教官の異動……………14 |
| 卒業生の動向……………10 | 窓 外……………羽根田 俊…14 |
| 助教授紹介……………11 | |



退官にあたって

第4代学長 清水 哲也

貴重な「かぐらおか」の紙面をさいて頂き、退官のご挨拶を申し上げる機会をお与え下さった「編集小委員会」の皆様のご高配に厚くお礼申し上げます。

6月30日付けをもちまして、任期満了にともなう「限り退職」を致しました。

平成3年7月1日より6年間にわたって教授会・事務局をはじめ全学の皆さんより頂いたご協力にあらためて深甚の謝意を表させていただきます。

この6年間をかえりみまして、まず脳裡をかすめるのは附属病院における「看護婦不足」問題でした。

平成2年12月頃から、平成3年3月にかけて看護職員に定員の10%強という、今では想像も出来ないような大量の欠員を生じ、苦肉の策として、手術件数の抑制、4階・5階病棟の稼働病床数を半減させることになり、「道新」は「旭川医大病院、看護婦不足のためICU閉鎖」と大きな見出しで、センセーショナルな取扱いをし、わが旭川医大は重大な局面を迎えるに至りました。

この原因は、札幌市で病院病床数の「総枠規制」が実施されることになり、私的病院が駆け込み増床に走り、結果として、わが医大病院看護部は、まさに「草刈り場」となってしまったためです。

したがって学長就任挨拶に参上しても、祝いの言葉ではなくて、異口同意に「いや、大変な時期に学長に!!」でありました。

しかし学長室で、ぼやいてばかりはおられず、当時の榎野局長と文部省文教施設部へ「お百度」を踏み、看護婦宿舍の改築を要請しましたが、担当官の姿勢は固く、「築17年にしかない医大の宿舍より、もっともっと老朽化の進んでいる東大や北大の看護婦宿舍をさておいて先行する理由はない」と叱り続けられたものでした。しかし「宿舍の入居率が20%に留まっているのは共同トイレ、共同シャワー室のためなので、なんとか各室にトイレ、バスルーム、

システムキッチンを設置する改修工事を認めて頂きたい」と要請を続けたところ、補正予算で8億5,000万が措置され、各室に750万をかけて100室の改修工事を完成することが出来ました。これによって市内の「ワンルームマンション」へ姿を消していた看護婦さん達が入居を始め、入居率は一挙に90%台へと上昇しました。この改修工事によって開始された看護要員確保作戦に「追い風」が吹き始めたのであります。国立札幌・道北の両病院の「定員外看護職員」の存在が厚生省の知るところとなり、両病院とも「新規採用」が禁止され、結果として両病院附属高等看護学院卒業予定者が一斉に本院へ応募してくれたために「欠員問題」は解決をみました。

この看護婦問題で奔走しておりました際に、痛切に感じましたのが、看護要員養成施設のない「新設医大」の「脆弱」さでありました。そこで「看護学科」設置に向け、本格的な取組みを開始致しました。さいわい、文部省の強力な指導と関係者一同の必死の努力によって、昨年度より発足し、本年度は教授7、助教授3、助手5が措置され、6階建の大規模工事の「半分」がI期工事として着工をみるに至りました。看護婦確保対策奔走に始まり、看護学科開設に明け暮れた6年間でしたが、全学の皆様より頂いたご理解、ご協力で深謝して擲筆致します。



退官記念講演会



学長に就任して

学 長 久 保 良 彦

このたび本学の学長を務めることになりました。浅学非才の身に余る重責ではありますが、誠心誠意職務を果たしたいと念じております。

ご承知のように近年の医学の進歩は、わが国に急速で未曾有の高齢化社会と慢性疾患、特に生活習慣病が主体となる疾病構造の変化をもたらしました。さらに情報化社会の進展に伴い、国民の医学医療に関する理解が進み、より質の高い医療が求められるようになっております。これらは同時に限らない医療の拡大を意味するものであります。

一方、国の財政事情の逼迫から、医療保険制度の改革や医師過剰の問題を含め様々な医療費抑制策が論議されております。さらに関連して、国立医科大学あるいはその附属病院の民営化ないしスクラップアンドビルドといった手荒いことも話題に上る世の中になりました。

医学医療をめぐるこのような社会的環境の変化に加え、数年前に行われた大学設置基準の改正は、各大学に多様で個性ある教育を自由に展開し、大学の活性化を図るよう求めております。

つまり、国立医科大学は医学・医療の急激な変化に伴う社会の要求に適切に対応し、かつそれぞれの大学が特色ある存在を示すことが問われていると言えましょう。

このような見方から、本学が当面していると思われる課題を掲げ、私たちの到達目標あるいは努力目標にいたしたいと考えております。

1. 医学教育について

まず選抜方法ですが、これまでのやり方に加え、推薦入学（平成10年度より）・4年制コース（学士入学）の導入を図ります。これは、医学・医療に従事したいというはっきりしたモチベーションを持つ人をより多く入学させ、社会の求めに対応しようというものです。

入試制度の改革につなげて、卒前の医学教育には従来の講義形式に代り、チュートリアルシステムあるいはクリニカルクラークシップといった問題自己解決型学習と呼ばれる方式を取り入れたいと考えております。本学での実施には、学士入学と絡みカリキュラムの全面的な改訂が必要となると共に、マンパワーが大きな問題となります。

その対応策として、臨床（あるいは研究）指導教官の導入が考えられますが、さらに医員・研修医を含む幅広い要員の確保が必須となります。

早期に医学医療に馴染ませるアーリーエクスポージャーあるいは卒前学外実習、さらには国際的視野を持つことの重要性から短期体験留学や単位互換性を含む

海外留学などは、是非早く実現させたい課題であります。

2. 看護教育について

看護学科の教官の整備、カリキュラムの充実を更に進めると共に、大学院開設に向け準備を進めます。

3. 研究について

研究は本学の将来を支える大きな柱であることは申すまでもありません。本学の研究活動の一層の活性化を目指し、これまで学科目、講座で進められてきた研究に加えて、相応しいテーマを選んでいただき、学内に時限付きでそのテーマに取り組む研究グループを作りたいと考えています。そして研究テーマを主題とする「旭川医科大学シンポジウム」を国内外の研究者を招いて開催し、研究の評価、さらなる研究の高度化を目指します。

また、中央研究施設の一層の充実を図りたいと考えております。

4. 附属病院について

大学附属病院は、健全な経営と共に高度先進医療を適用しなければならないという宿命を負わされております。国の財政再建が叫ばれている折柄、今後ますます病院の収入増が求められましょう。また、附属病院には地域社会の医療に責任を持つ広域社会的サービスが課せられておりますが、特に、道東・道北という広範な地域を診療圏とする本学附属病院の特徴を考慮に入れた対応をしなければなりません。アメニティの改善、学内LANを利用するインテリジェントホスピタル化が急がれます。

また、専門分野が高度化する一方、患者中心の総合的なプライマリケアの重要性が叫ばれております。このような状況は明らかに現在の講座別診療体制では対応が難しくなっていることを示すものであります。卒前・卒後臨床研修の観点からも、その再編と機能強化は緊急の課題と考えられます。

具体的には、総合診療部の新設、診療科の増設と臓器別診療システムの導入、特殊機能センターの新設（例えば健康科学広域総合医療情報センター、ライフサポートセンター、他）などが挙げられます。

これらの課題の多くは、その解決に予算と人手の面から厳しい縛りを受け、大きな困難を伴うことが予想されます。しかし、積極的な対応が急がれるものばかりですので、学内のコンセンサスと協力を得ながら全学的な問題として一つ一つ解決に向かって努力し、21世紀における旭川医科大学のさらなる発展を期したいと存じます。



副学長（附属病院長） 就任にあたって

副学長 牧野 勲

今の世の中は全ての分野が急速に変化し、一つの変化が終息しないうちに次の変化が始まる目まぐるしい時代であります。本学附属病院は開院以来20余年を経過しますが、道北、道東地域の特定機能病院として、常に高度な先進医療を提供し、同時に医師養成の教育病院としての役目を担ってきました。しかし最近は大学病院といえどもその在り方が議論され、取り巻く環境が次第に厳しさを増しています。その上、行政改革の一貫として大学病院の民営化が取り上げられ、大学病院がその使命を達成するための創意工夫が強く求められている現状にあります。このような時に、はからずも本学附属病院長の大任を仰せつかり、任務の重大さと責任の重さを痛感して居ります。何卒よろしくお願ひ申し上げます。現在の医療はその構造が多面化して居りますが、それと大学病院の将来とを重ね合わせて考える時、次の4側面を考慮することが重要であると考えます。つまり医学の科学技術面、医療におけるサービス面、医の倫理面、そして医療の経済的側面であります。

(1) 科学技術面については電子工学などに支えられた医療テクノロジーが格段に進歩し、診断治療は客観的計測的データを基に疾患の病態が推論され、治療方針が決定される図式になって居ります。したがって、大学病院が今後とも高度水準を持続するには（これが大学病院の最も重要な使命ですので）、医療設備、医療機器の整備は勿論のこと、診療システムの再編成、チーム医療などを考慮し機能強化を図ることが必須であり、学内情報システムの一層の高度化や増改築によるスペースの確保が併せて重要であります。これらの問題解決には予算と人員の面から厳しい縛りを受け、多くの困難を伴いますが、私は時代の要請に応じた積極的姿勢を貫きたいと考えて居ります。(2) 医療サービス面では医療が人間に接するサービス業としての一面があり、公共性、公平性に加えて生命人体への直接性があります。そ

れゆえ、リスク管理によるリスク発生防止を行い、良質な医療サービスの提供に心がけ、一方において患者環境の整備やアメニティの向上に努めたいと思っております。(3) 医の倫理を守るため本学の倫理委員会は幾つかの課題を討議して来ました。医師と患者間の信頼関係の構築は医師の適確な医療行為とインフォームドコンセントの真意徹底がキーポイントであります。近い将来には診療報酬明細書（レセプト）やカルテの開示請求もありうると思われまますので、それらに対する具体的対応策も考えておかねばなりません。(4) 経済的側面ですが、医療技術が進歩し、医療レベルは向上するに伴い実質コストが高くなり、国民医療費が次第に財政上の問題になって、これらに対する保険制度の抜本的改革が問われています。現在の大学病院はこれまでとは違って点検評価が毎年行われ、文部省からその運営について一層の改善努力が求められて居ります。具体的には病院収入増のために病床稼働率の一層の向上、病床有効利用、職員配置の見直し、医薬品や医療材料の購入費の軽減、在庫管理の適正化などあります。上記の外に、大学病院は医師の教育研修の場ありますので、研修成果が挙がるよう体制や方式の見直しも大切であり、最近では医師のみならず医療人養成の場であることも強調されています。

このように本学附属病院の現時点における問題点を考えるとき、本学病院は今まさに転換期にあり、病院長としての責務が非常に重いことを自覚しております。本学附属病院の発展のために、皆さまのご協力とご理解を賜りたく何卒よろしくお願ひ申し上げます。



教授就任の挨拶

—求む！情熱ある大学院生—

解剖学第一講座 教授 木山博資

旭川は自然が豊かな素晴らしい町です。私が着任したとき（2月中旬）すべてが雪の中で、滑らないよう足下ばかりを見て歩いていましたし、教室作りに一生懸命で周りを見る心の余裕もありませんでしたが、雪が融けるにつれて雪の下からいろいろなものが顔を出し、毎日小さな発見がありました。まだ寒いある日、道端にクロッカスの花が咲いているのを見つけたとき、私が2年間暮らした英国ケンブリッジにあるトリニティカレッジの裏庭一面に、やはりまだ寒中、春を告げるかのように咲いていたクロッカスを思い出しました。ここは英国の風土と似たところがあるのではとっていたところ、一斉に咲き始める花々、さまざまな色が張り合わされた柔らかな丘、大きな円筒形に束ねられた牧草、構内の芝を刈る音と刈った後の草の匂い、英国のケンブリッジ郊外の風景の断片があちこちに見られるのではないですか（これで英国風のパブリックハウスが大学の横にあれば最高なのですが）。

さて、遅れましたが私は昨年3月をもって退官されました小野一幸教授の後任として本年2月16日より解剖学第一講座を担当することとなりました。前任地は、大阪大学で解剖学第二、神経解剖の二つの教室で助教授を務めた後、本学へ着任いたしました。こちらではマクロの解剖を担当しております。研究の主要テーマは損傷神経の生存・維持と再生・機能回復です。私は免疫組織化学やin situハイブリダイゼーション法を用いて、伝達物質や受容体の局在を明らかにし化学的な神経回路の解明に関する仕事を以前行っておりました。その後、研究の広がりにつれて他の分野への興味が広がってまいりました。しかし、私の興味の広がるスピードをはるかに凌ぐ勢いで世の中の学問は激動しております。新たな分野が生まれ急速に発展したかと思えば、旧来の分野がしばんでしまいます。一方、解剖・生理・薬理など学生に対する教育は厳然とした講座制がしかれて

おります。研究のダイナミック性と体系だった学問を教える講義のスタティック性の間に生じる活断層は、どの分野でもエネルギーを蓄えているのではないのでしょうか。基礎医学の中で最もエネルギーのたまっている活断層は多分解剖学なのではないでしょうか。従って、研究の幅・自由度は極力増やし、一方教育は体系だった学問を教えることは当然ですが、一部に流動的かつ学際的な自由度の高い部分を確保しておくことが大事なのではないのでしょうか。

昨日届いた雑誌ScienceのNews & Commentに「U.K. Universities : The End of Equality」と題したコメンタリーが掲載されておりました。英国では財政難のおり、すべての大学を予算面で平等に取り扱うのではなく、いくつかのエリート大学に重点的に研究予算を配分したらどうか、という内容を含む報告でした。現在日本でも大学院の重点化が進んでおり、英国と同様の道を歩もうとしているのではないのでしょうか。そのコメンタリーのなかにあった「No soft options」という言葉が強烈な印象を与えました。私はまだ新米教授で、この辺の世の中の動きがよくわからないことが多いのですが、間違いなく目の前に迫りつつある大学の「ピックバン」に対し、解剖学第一講座は果たして耐えられるだけの強さを持っているのだろうか、本当のところかなり不安です。教室の整備を進めながら、どうやったら国際的に競争力のある足腰の強い教室にできるのだろうかと考える日々です。多分、一つの答えは「人」だと思います。なるべく早い時期に旭川医大の学生さんとじっくり付合って、よい「人」を育てたいと思っております。そこで、最後に本紙面をお借りいたしまして宣伝をさせていただきます。「第一解剖は神経科学に興味のある情熱ある学生・大学院生を大募集しております！」皆さまよろしく願いいたします。



教授就任にあたって

(基礎医学およびパラメディカルとの関係)

整形外科学講座 教授 松野 丈夫

本年2月16日付けで初代竹光義治教授の後任として整形外科学教室を担当することになりました。新任の挨拶をかねて、“臨床と基礎”、“臨床とパラメディカル”に関して日頃感じていることを述べたいと思います。

私は、昭和46年に北大卒業後第二病理学講座に7年間お世話になってから、整形外科に入局しました。臨床医を志す学生さん達にとって卒業後基礎医学の講座に入ってから臨床の講座に入局することが良いのか、臨床の講座に入局しある程度臨床の専門医になってから基礎の講座で実験などを行うことが良いのかは、非常に迷うところだと思います。

私は当時の第二病理学講座では病理標本・電顕標本の作り方から剖検までの診断病理学全般に従事し、その間の約2年間は北大病院検査部病理で病院全科からの病理組織標本の診断に従事し各科の病理標本全ての診断を経験出来たことは今でも非常に役立っています。もし整形外科を学んでから病理の教室へ行ったのであれば、その興味の対象は骨・軟部腫瘍だけになり、非常に狭い分野の病理学だけを学ぶことになっていた様な気がします。

一般に臨床に所属するより先に基礎の教室で実験を行う長所としては、年齢的に若い内に実験をスタート出来るため若い脳みそによる臨床とは離れた全く斬新なアイデアの出る可能性があり、基礎的な実験器具・器械に精通する機会が多いためデータの信頼度が高くなることなどがあげられますが、一方短所としては、臨床応用の利かない実験に陥る危険性が高くなること、臨床に戻ってから同期の臨床医より臨床手技が劣ること、基礎の深みにはまりこみ臨床に戻る機会を逸することなどがあげられます。

さてこのどちらが良いのでしょうか。結論として私は将来的に臨床医を志す学生さんでも基礎的な研究を十分にしてから臨床に行っても良いと思います。アメリカでは医学部在学中の夏休みなどに基礎的な

実験を行うことが多い様に、若い内に基礎的研究の世界に触れることは非常に良いことだと思います。また先に短所としてあげた、臨床応用の利かない実験に陥る危険性が高いことに関しては、臨床の教室と十分なコンタクトをとりながら実験を行うことである程度防ぐことが可能ですし、将来良い臨床医になれないということは迷信にすぎません。ただし、基礎の実験が面白くなり、臨床に戻る機会を逸することは十分あり得ることでありますが、それはそれで良いのではないのでしょうか。

臨床医としてパラメディカルの分野に精通することは必要です。私のパラメディカル分野とのつきあいは、卒業間近の6年目の夏に始まります。当時外科系の臨床医を志していたこともあり夏休み期間を利用してある総合病院の外科にお世話になりました。しかしながら、予想とは裏腹に、“君たちは外科にいるより、検査部にいた方が学ぶことが多い”という外科主任部長の一言で、我々は病院の検査部で血液・生化学などの検査をやらされたのでした。最初は若干の不満もあった私でしたが、そのうちに検査技師の方々とは親しくなり、検査データが如何にして出てくるのかに興味を惹かれるとともに、技師の方々の医療に対する考えかたや医療あるいは医者に対するうっ積した不満などを聞く機会を得たことは貴重な体験でした。近年各大学でearly clinical exposure (ECE) と称して大学入学後すぐの学生さんに医療の最前線(看護・救急など)での経験をさせることが始まりましたが、非常に良いことだと思っております。夏休みなどに臨床講座を見学する学生さんは多いと思いますが、検査部などパラメディカルでの経験をしてはどうでしょうか。そのことはその後の臨床医としての人生で大いに役立つと思います。



教授就任にあたって

地域保健看護学講座 教授 望月吉勝

本年4月より、看護学科地域保健看護学講座を担当することとなりました。昨年開設されたばかりの看護学科を創りあげていくという任務の重さに身の引き締まる思いです。

私は、旭川で生まれ育ち、北大理学部で生物学を学びました。大学院ではアイソザイムの研究に携わり学位取得後、本学の医学科公衆衛生学講座助手として採用されました。本学に移ってからは、重金属の毒性学的研究に携わっていましたが、公衆衛生の目的のうちでも、特に健康増進につながる仕事をしたいと思い、健康教育学と疫学の研究に取り組んできました。

健康教育は、予防医学でいう第1次予防のうちでも第1次の方法です。生涯にわたる健康を考えると、やはり、子どもの時からの健康的なライフスタイルの確立が大切です。そして、学校における健康教育の充実が必要です。そこで、学校保健学、教育学、心理学、予防医学などの分野の人たちと、学際的共同研究を行ってきました。まず、小・中・高校生のライフスタイルの現状を知るために、9都道府県で調査を行いました。次いで、学校において有効な健康教育を実施するために、教育プログラムづくりに取り組んできました。

こうした健康教育は、あるとき外部から講師を呼んで講演会を開けばいいというものではありません。学校現場で日々教育にあたっている教師が出来るものでなければなりません。そこで、この研究グループ主催で、学校現場の教師のためのワークショップを6年前から開いています。また、学校だけで出来ることでもないで、家庭・地域と連携を目指した試みも、大阪府のある小さな町で行っています。

いろいろの分野の人たちとの共同研究は、異なった見方・考え方や研究手法を知ることが出来、有意義なものでした。また、やや若手から中堅くらいの年齢層（ただし、共同研究のスタートの時点で）の

仲間として、和気あいあいと、そして仕事には厳しく取り組めたことも、得難い体験でした。

内外の関連学会でネットワークを広げていくなか知り合った英国マンチェスター大学のAnne Charlton教授のもとで、文部省在外研究員として10カ月間も自分の仕事だけに専念できたのも貴重な体験でした。Charlton教授が主宰するCRC Education & Child Studies Research Groupは、医学部の中の公衆衛生・疫学科にあります。CRC（Cancer Research Campaign; 癌研究活動財団）は、癌制圧を目指す全英規模の団体でして、この研究グループのメンバーは、マンチェスター大学の職員ですが、研究費はCRCが出しており、寄付講座にあたるのでしょうか。この研究グループのボスもサブボスも女性でして、総勢10人ほどのメンバーのうち、男性は私を含めても3人だけでした。しかし、仕事に女性も男性もないという雰囲気でしたし、ボスの人柄も相俟って、快適な留学生活でした。この経験は、看護学科のなかの数少ない男性教官として生かしていけると思います。

さて、創生に参加出来るというのは、なかなか機会のあることではありません。思い起こせば、私が本学に赴任したのは、医学科の1期生が卒業する年の2月でした。公衆衛生学は4年生で履修のため、初期の卒業生たちとは、授業などでは直接会っていませんでしたが、彼らの活躍をうれしく思っていました。さらに遡れば、私が北大に入学した年に歯学部が新設され、何カ月か遅れで入学してきた彼らが1期生として自ら歴史を創っていく様を見て、羨ましくもありました。新設看護学科の歴史を創っていくというロマンを胸に頑張っていきたいと思いません。



三つの転機（就任にあたって）

薬剤部 教授 松原和夫

平成8年3月にご退官されました稲垣俊一先生の後任として、平成9年8月1日付けで薬剤部長として島根医科大学より赴任して参りました。薬剤部長としては3代目、薬剤部教授としては初代になります。

私は、大学時代と留学していた時期を除けば、出生以来神々の国・島根県出雲地方で過ごして参りました。ほぼ40年を過ごした故郷を離れ、地理的・気候的に大きく異なる北海道の地に赴任することは、私にとって一つの大きな転機となりました。旧暦では10月は神無月ですが、出雲地方では神在月となり、全国から8百万の神々が出雲大社に集まっています。赴任にあたって、神様のご利益少しでも第二の故郷になるであろう旭川の地に運べたらと思った次第です。

昭和53年に京都大学薬学部を卒業し、島根県の日本海沖合に浮かぶ隠岐諸島にある日本一小さな保健所にほぼ1年間勤務していました。小さな職場でしたから、仕事にあたっては活字が指導者でした。当時は、京都から直接隠岐の島に向ったものですから、後醍醐天皇のようだったと思います。しかし、今から思えば、その約1年間の経験が、それ以後の大学での仕事を進めて行く上で大きく役に立ったと思う次第です。その後、島根医科大学法医学教室の開講に前後して入局し、旭川医科大学赴任までの18年余りを島根医科大学に奉職していました。その間の平成2年から3年にかけては、米国シカゴのロヨラ大学医学部生化学教室に留学していました。法医学教室在職中は、昨今の推理小説やサスペンス物のような出来事は少なく、もっぱら実験室で試験管を振る毎日でした。研究は、薬物および内因性活性物質の微量分析方法を開発すると共にそれらの生体内での分布・代謝・毒性などを研究対象として来ました。近年は、神経化学的な研究を重点的に行い、その中で主な研究はパーキンソン病に関連した研究です。

具体的には、自然発症性のパーキンソン病の発症原因物質候補として β -カルボリン類を提唱し、その化合物の活性化機構および毒性発現機構の研究を進めて来ました。また、薬剤による健忘症などにも興味を持ち、健忘時の海馬におけるグルタミン酸の伝達などの研究を行って来ました。このように、島根医科大学在職中にもっぱら研究生活に仕事の大半を費やして来たものですから、医療現場である附属病院薬剤部への転任は、私にとってもう一つの大きな転機となりました。

また、近年医療を取り巻く環境が大変厳しいことは皆様ご承知と思います。中でも、病院薬剤部における薬剤師の業務は激変しつつある過渡期にあります。つまり、これからの薬剤師には、これまでの仕事の上に、医師・看護婦の皆様と共同して医療を積極的に担えるような能力が必要とされるようになっていきます。その上、大学病院の薬剤部におきましては、業務の他にも教育・研究面にもこれまで以上に力を注ぐ必要が求められています。その他、薬剤師の職能の変化に伴っての薬学教育の改革が求められ、大学病院の薬剤部は薬剤師の卒前・卒後教育の場として大きな比重を占めるようにもなっています。従って、医学部附属病院薬剤部にとっても、現在大きな転機を迎えています。

このような私自身の大きな二つの転機と着任部門の大きな転機が、うまくかみ合って旭川医科大学の発展に少しでも寄与できればと考えている次第です。最後に、皆様方のご指導ならびに温かいご支援をお願い申し上げます、着任の挨拶と致します。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 阿部 展子



ここ旭川で私の2度目の大学生活がスタートして半年になるうとしています。旭川医大に入学できていちばん喜んでくれたのは両親でした。法律の勉強から

医学の勉強という文系から理系への私にとっては大変困難な転換も心から応援してくれ、幾度か挫折しかかった私をいつも温かく見守り激励してくれました。そんな両親への感謝の気持ちを持ちつづけ、学業に励みたいと思っています。

将来進みたい分野はまだ自分の頭の中に漠然としか描かれていませんが、脳死や臓器移植、告知、末期医療のあり方など、社会的に様々な問題が提起されている中で医師を志すことに、今から責任の重さを感じています。これらの問題は是非を二者択一で論じられるものではありません。そこでは法的、倫理的問題や心のケアのあり方なども考慮した

多面的な物の見方が必要となってくるでしょう。医師に求められるのは最先端の知識や高度な技術だけではなく、いろいろな問題を考えあわせて全体を見渡す広い視野と、人をいたわり思いやる気持ちではないでしょうか。今後医学を勉強しその知識を身につけていく一方で、人間の生命に直接かかわる者として、内面的にももっと成長していかなければ、と思っています。

私はこの自然豊かな旭川で、学生時代という貴重な時間を再び持つことができました。これを、いろいろな人達と出会い、たくさんのことを学び、視野を広げるための時間として有意義につかいたいと考えています。

多様な価値観が混在する現代社会においては、各人の死生観、医療観も様々でしょう。いずれ自分の進む分野は決まると思いますが、その時は、それぞれ異なる考えや感情を持った患者さんひとりひとりと理解し合い、心を通わせることのできるような医師になりたいと願っています。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 佐々木亜妃



北海道に来て、早くも6か月が過ぎようとしています。東京で生まれ育ち、1学年1,700人を超えるマンモス校を卒業した私にとって、旭川医科大学の学生としての生活は何もかもが新鮮です。初めて見る

北海道の空はとても広く、その空高く聳える山を見ては「本当に青い！」と感動しました。同じ目的を持つ良き仲間達と出会い、講義やグループワークを通じて学び、語り合うことで新しい生活や自分に看護ができるのかという不安は、「やってみせる」という自信と希望に変わっていきました。

大学受験を前にし、本当に看護を学びたいのかと考えていた時期もありました。そして、人間らしいとはどういう生き方なのだろうかとも思っていました。酪農の道に進み、自然と共に生きていき

いと考えたこともあります。しかし、酪農を営みながらその地域の人々の健康を守る力になれば、と考えている自分に気がつき、私が学びたいこと、それは看護なのだ改めて実感しました。それをどのような世界で、どう活かすかは、4年間じっくり考えていきたいと思っています。

北海道に行くことに対し、はじめは反対していた親も、自分の道を行くことがどんなに大切なことを、そっと教えてくれました。私の夢を支えてくれる家族に、帰るたび成長している姿を見せたい。そして、目標を見つけた時の勇ましい気持ちを忘れず、「このチャンスを逃してなるものか！」といつも自分を励ましていきたいです。

今、私達看護科2期生は、人間について様々な角度から学んでいます。人間について学ぶことで、自分をしっかり見つめていく目も養っていきたくです。又、60人の仲間と助け合い、切磋琢磨しながら教官や先輩、これから入学してくる学生達と共に、看護学科の歴史を築く力になりたいと願っています。

助 教 授 紹 介



氏名 松谷 洋子
 所属 臨床看護学講座
 出身大学 トロイ ステイツ 大学院
 一言 日進月歩の先端医療に対応できるところの“知識と技術と真心の看護”実

現のため、私の愛する若き学生と共に、我、旭川医大看護学科を日本一、いいえ世界一の“21世紀の看護者育成のオリジン”とすべく、我が全力を尽す覚悟です。



氏名 三田村 保
 所属 数理情報科学
 出身大学 北海道大学工学部
 一言 専門分野はシステム工学

です。工学部出身の若輩ですので、未熟な点が多く、ご迷惑をかける点が多いかと思えます。諸先生からのご指導、ご鞭撻のほどよろしくおねがいいたします。



氏名 大崎 能伸
 所属 第一内科
 出身大学 旭川医科大学大学院
 一言 臨床医の育成には優れたプログラムでの臨床トレーニングが重要である。し

かし、多様に富んだ実際の臨床の場では臨床トレーニングを積んだだけではなく、科学的な考え方ができる医師が重要な役割を持つことが多い。柔軟で科学的な発想から臨床ができるように後輩を指導したい。



氏名 玉手 健一
 所属 産婦人科学講座
 出身大学 旭川医科大学
 一言 出生という、人生において極めて晴れやかなイベントに関わりたいと産婦

人科を選び、気がつくとう生前に手を出していました。排卵、受精、着床等の現象は極めて奥が深く、興味の尽きない分野です。



氏名 北村 久美子
 所属 地域保健看護学講座
 出身大学 北海道大学医学部附属看護学校
 北海道立衛生学院保健婦科
 北海学園大学
 一言 4月、赴任早々から授業

が続いている。看護を学ぶ学生は、1回生としての自覚を持ち、実に熱心である。それ故に、看護大学における教育の責任の重さを痛感している。新しい組織での戸惑いもあるが、広いキャンパスで学生と共に学べる環境に満足している。

講 師 紹 介



氏名 長谷部 直幸
 所属 第一内科
 出身大学 旭川医科大学大学院
 一言 研究システムの活性化と

充実を優先に生活したいと念願していますが、病棟医長としての臨床と講義時間の激増した学生教育の狭間で安定を得るにはしばし時間が必要と思われます。どれも手を抜かず全てを完璧にこなす事を夢見て全てが中途半端にならぬよう自戒の毎日です。マクロとミクロを整然と融合させる循環器研究を夢みておりますが、まだまだ努力が足りません。学生には“分かる講義”しかも“分かりたくなる講義”をと思ってインパクトのある授業を工夫しておりますが、これもまだまだです。



氏名 横田 欽一
 所属 第三内科
 出身大学 旭川医科大学
 一言 小学時代は帯広アドニス

少年少女合唱団、中学・高校時代は天文部に所属。そのままの趣味を引きずり、夜はカラオケの練習か、自宅に天文台を置いて星を見ている。ちなみに昼間は食道と胃を見ている。



氏名 秀毛 範至
 所属 放射線科
 出身大学 金沢大学
 一言 現在、放射線科で核医学

を担当しており、放射性トレーサーを用いた各種臓器機能の画像診断、特にトレーサーの動態解析による臓器機能の数量化を研究の主題としています。まだまだ力不足でご迷惑をかける点多々あるかと存じますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

第44回北海道地区大学体育大会

第44回北海道地区大学体育大会が、北海道教育大学の当番で、7月11日（金）～14日（月）まで開催されました。

道内の国公私立大学46校が参加し、本学からは男子10種目、女子5種目に参加して熱戦を繰り広げ、ソフトテニス男子・女子がそれぞれ第3位と健闘しました。

参加種目の成績は次のとおりです。

（学生課）

| 種目 | 順位 | | 優勝 | 準優勝 | 旭川医大 |
|----------|----|------|------|------|------|
| | 男 | 女 | | | |
| 陸上競技 | 男 | 学院大 | 旭教大 | 旭教大 | 第9位 |
| | 女 | 旭教大 | 学院大 | 学院大 | 第6位 |
| 準硬式野球 | 男 | 函教大 | 学院大 | 学院大 | |
| ソフトテニス | 男 | 室工大 | 道工大 | 道工大 | 第3位 |
| | 女 | 旭教大 | 道医療大 | 道医療大 | 第3位 |
| バスケットボール | 男 | 北海学園 | 道都大 | 道都大 | |
| | 女 | 酪農学園 | 旭教大 | 旭教大 | ベスト8 |
| バレーボール | 男 | 北海学園 | 学院大 | 学院大 | |
| | 女 | 旭教大 | 帯畜大 | 帯畜大 | |
| 卓球 | 男 | 北海学園 | 帯畜大 | 帯畜大 | |
| 剣道 | 男 | 北大 | 学園北見 | 学園北見 | |
| | 女 | 北大 | 北海学園 | 北海学園 | |
| 弓道 | 男 | 北大 | 学院大 | 学院大 | ベスト8 |
| | 女 | 北大 | 学院大 | 学院大 | ベスト8 |
| サッカー | 男 | 道都大 | 学園北見 | 学園北見 | |
| ハンドボール | 男 | 道都大 | 樽商大 | 樽商大 | |
| 総合 | 男 | 道都大 | 北海学園 | 北海学園 | 第14位 |
| | 女 | 旭教大 | 北大 | 北大 | 第9位 |

（個人）陸上競技 男子砲丸投 優勝 松尾公美浩



第40回東日本医科学生総合体育大会（夏季部門）

第40回東日本医科学生総合体育大会（夏季部門）が、東北大学医学部の主管で、7月25日（金）から36校が参加して行われました。

本学からは男女あわせて25種目に参加、上位入賞など好成績を残しました。

参加種目の成績は次のとおりです。

（学生課）

| 種目 | 順位 | | 優勝 | 準優勝 | 旭川医大 |
|----------|----|--------|----------|----------|------|
| | 男 | 女 | | | |
| 陸上競技 | 男 | 昭和大 | 筑波大 | 筑波大 | |
| | 女 | 筑波大 | 新潟大 | 新潟大 | |
| 準硬式野球 | 男 | 新潟大 | 東京大 | 東京大 | |
| テニス | 男 | 昭和大 | 濁協医大 | 濁協医大 | |
| | 女 | 日本医大 | 福島医大 | 福島医大 | |
| ソフトテニス | 男 | 山形大 | 新潟大 | 新潟大 | 第6位 |
| | 女 | 信州大 | 旭川医大 | 旭川医大 | |
| 卓球 | 男 | 山梨医大 | 新潟大 | 新潟大 | |
| | 女 | 福島医大 | 東京女子医大 | 東京女子医大 | |
| バレーボール | 男 | 信州大 | 北海道大 | 北海道大 | |
| | 女 | 山形大 | 信州大 | 信州大 | |
| バドミントン | 男 | 札幌医大 | 東北大 | 東北大 | 第3位 |
| | 女 | 東京女子医大 | 山形大 | 山形大 | 第5位 |
| サッカー | 男 | 筑波大 | 順天堂大 | 順天堂大 | |
| バスケットボール | 男 | 自治医大 | 山形大 | 山形大 | |
| | 女 | 秋田大 | 聖マリアンナ医大 | 聖マリアンナ医大 | |
| 柔剣道 | 男 | 自治医大 | 山形大 | 山形大 | |
| 弓道 | 男 | 順天堂大 | 福島医大 | 福島医大 | |
| 空手道 | 男 | 慶応大 | 福島医大 | 福島医大 | 第3位 |
| 水泳 | 男 | 自治医大 | 信州大 | 信州大 | |
| | 女 | 慶応大 | 山形大 | 山形大 | |
| ハンドボール | 男 | 筑波大 | 東京女子医大 | 東京女子医大 | |
| ゴルフ | 男 | 自治医大 | 山梨医大 | 山梨医大 | |
| ゴルフ | 男 | 弘前大 | 慶応大 | 慶応大 | |
| | 女 | 慶応大 | 聖マリアンナ医大 | 聖マリアンナ医大 | |

（個人）陸上男子100m 稲村 純季 4位
 陸上男子200m 稲村 純季 5位
 陸上男子1600mR 和田・稲村・佐々木・松尾 4位
 陸上男子砲丸投 松尾公美浩 2位
 陸上男子円盤投 松尾公美浩 7位
 陸上男子ハンマー投 松尾公美浩 5位
 陸上女子100m 石川 千里 3位
 陸上女子200m 石川 千里 2位
 バドミントン女子シングルス 奥島 華純 1位
 バドミントン女子ダブルス 三上沙和・奥島華純 1位
 剣道 宇佐美 伸 3位

体育大会実施される

毎年恒例の学生主催による体育大会が、9月10日（水）実施されました。

当日は秋晴れの下、お互いに叱咤激励し合い、学年の名誉をかけてバスケットボールなど各種目で熱戦が繰り広げられ、1日中歓声があがっていました。

なお、総合優勝は、体育大会参加最後の年になる医学科第5学年が勝ち取りました。

（学生課）



研究室紹介

放射性同位元素研究施設 技官 鹿島 盛雄

R I 研究施設が共同利用施設として開設されたのは昭和50年11月1日である。現在の施設長は9代目の飯塚一教授(皮膚科学講座)、放射線取扱主任者は吉田逸朗助教授(細菌学講座)及び、副主任者には亀下勇助教授(生化学第一講座)が任命されている。管理室のスタッフには、木谷教務職員、鹿島、長原、田口の技官、専門職員の中尾事務官が配属されている。木谷嬢は研究に没頭する一方で本施設新規使用者の教育訓練に当たっており、放射線安全管理の実務を鹿島・長原・田口のシャイな三銃士が励まし合い、けなし合いながら担当している。中尾母さんは、施設の花としてR I 購入手続き等の事務部門を担当し、いつも心に太陽を・人には愛を・唇にメロディーを(ソルフェージュで活躍中)信条として、細身の体にむち打ちながら一人で複雑な業務をてきぱきこなしています。

当施設は放射線物質を取り扱う共同利用施設としての役割が主であり、液体シンチレーションカウンターやオー

トウェルγカウンター、アミノ酸シーケンサー、γ線照射装置、放射線画像解析装置等が設置されている。また一方で、放射線障害防止法と言う法令の基に、施設の使用方法等が厳しく管理されている放射線施設でもあります。中でも圧巻は科学技術庁による立入検査で、毎回これを受ける度に、凄まじいプレッシャーが重くのし掛かり、寿命が縮まる思いがしております。

これまで、多くの方々にご指導、ご協力いただき感謝致しますと共に、これからの研究のニーズに答える共同利用放射線施設としてスタッフ一同努力しますので、皆様方のご支援をよろしくお願い申し上げます。



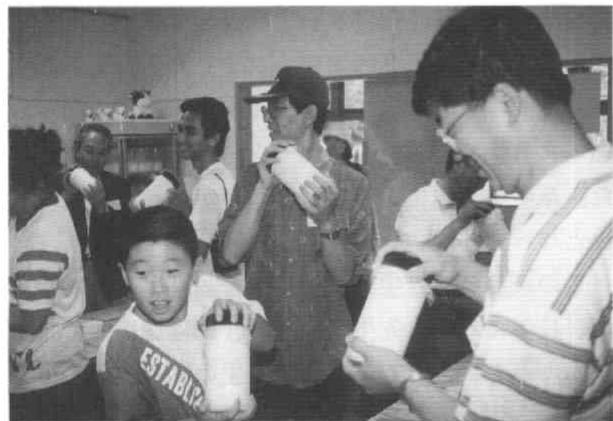
外国人留学生オリエンテーション及び交流会実施される

7月30日(水)外国人留学生オリエンテーション及び交流会が、富良野市にある「富良野チーズ工房」と「ワイン工場」で実施されました。

これは留学生を近郊の文化施設に案内し、日本を理解してもらうとともに、指導教官・職員及び留学生相互の交流を図ることを目的に毎年実施しているものです。

「富良野チーズ工房」では、富良野市で採れた新鮮な牛乳からバターを作る手作り教室を体験し、参加者全員が悪戦苦闘しながらバターを作り上げ、お互いに試食・批評し合いながら大いに交流を深めることができました。

また、「ワイン工場」ではワインの製造工程・貯蔵法などを見学し、「ふらのワイン」について興味を深めたようです。(学生課)



学生教育研究災害傷害保険の加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中・通学中および大学の授業等、学校行事または課外活動で施設間移動中における災害事故補償のために『学生教育研究災害傷害保険』の賛助会員大学となり下記のとおり加入受付事務等を行っています。本保険は、学生の互助共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備え、できるだけ全員の加入を勧めています。

まだ加入していない学生、保険期間の切れている学生は教務部学生課に申し込んでください。

記

1. 受付期間 平成9年10月1日(水)~平成9年10月31日(金)
2. 受付窓口 教務部学生課専門職員(厚生担当)
3. 保険料(通学中等傷害危険担保特約含む)

| | |
|-----|--------------|
| 6年間 | 4,300円(900円) |
| 5年間 | 3,750円(800円) |
| 4年間 | 3,100円(650円) |
| 3年間 | 2,400円(500円) |
| 2年間 | 1,650円(350円) |
| 1年間 | 950円(200円) |

()は通学中等傷害危険担保特約保険料分

4. 支払い保険金の種類と金額

| 区分 | 正課中 学校行事中 | 学校施設内の休憩中 学校施設内外の課外活動中 (学校施設外の課外活動中 については、大学に届出た活動 に限る。) |
|---------|------------------------------|--|
| 死亡保険金 | 1,200万円 | 600万円 |
| 後遺障害保険金 | 54万円~1,800万円 | 27万円~900万円 |
| 医療保険金 | 実治療日数4日 以上が対象 6千円~30万円 | 実治療日数14日 以上が対象 3万円~30万円 |
| 入院加算金 | 1日につき4,000円 | 1日につき4,000円 |

| 通学中等傷害危険担保特約 | |
|--------------|---------------------------------------|
| 区分 | 通学中、大学の授業等、 学校行事または課外活動 で施設間移動中 |
| 死亡保険金 | 600万円 |
| 後遺障害保険金 | 27万円~900万円 |
| 医療保険金 | 実治療日数14日 以上が対象 3万円~30万円 |
| 入院加算金 | 1日につき4,000円 |



訃報

本学名誉教授 小野寺
 壮吉氏（72歳）には、平
 成9年9月5日（金）午後
 1時35分ご逝去されました。
 ここに謹んで哀悼の意を
 表します。

同氏は開学と同時の昭和48年9月29日に内科学第一講座教授として就任され、平成4年3月31日停年により退官されるまで永年にわたって、教育研究及び臨床にあたられ、本学の発展に多大な貢献をなされました。

特に、学術研究面では循環器内科学の肺循環に関する研究を行い、その優れた研究業績は国際的にも高く評価されておりました。

また、同氏は、附属図書館長及び教育担当副学長の要職を歴任され、道北の医療の中心としての本学の礎を築いたことは高く評価されており、その功績はまことに顕著でありました。

（庶務課）

教官の異動

| | | | | |
|----|---------|-------|-----|---------------|
| 辞職 | H9.7.31 | 内科学第二 | 助教授 | 衛藤 雅昭 |
| 転任 | H9.8.1 | 薬剤部 | 教授 | 松原 和夫 |
| " | " | 数理情報学 | 助教授 | 三田村 保 |
| 昇任 | " | | 副学長 | 牧野 勲 (病院長) |
| " | H9.9.1 | 精神医学 | 教授 | 千葉 茂 |
| 辞職 | H9.9.30 | 小児科学 | 講師 | 東 寛 |
| " | " | 小児科 | " | 岡 隆治 |
| 昇任 | H9.10.1 | 内科学第二 | 助教授 | 田中 廣壽 |
| " | " | 小児科 | 講師 | 矢野 公一 |



訃外

羽根田 俊

故 小野寺名誉教授を偲んで

本学名誉教授で当講座前教授であられる小野寺壮吉先生が、この9月5日（金）に急逝されました。私にとって小野寺先生は20年間に渡る恩師であり、また医局員として最初に仲人をしていただきました。そこで、この紙面をおかりして先生との思い出を少し書かせていただきます。

小野寺先生は昭和48年（1973年）9月に北海道大学第一内科助教授より本学第一内科教授に発令され、本学の基礎研究棟や病院の設計・建設や臨床実習カリキュラムの確立などに携わり、平成4年（1992年）3月に御退官されました。

当初、本学において新しい医学教育を実施するために、先生が中心となられ臨床実習カリキュラムの確立に奔走されました。時には、その実施において、学生、特に1、2期生に対しては厳しく指導されておられました。医局員に対しても現場では厳しく指導されておりましたが、仕事が終わりますと医局でビールを飲みながら談笑したり、時には自宅に呼

んで頂き、食事をご馳走してくださるなど、厳しくも優しく接して頂きました。

そして、本学の医師国家試験での合格率が数年間に渡り全国有数であった時、先生は医局で「ある意味では厳しくしてきたが、本当に良かった。先輩のいない本学の学生がどうなるか心配だったが。これで、今まで以上に本学の卒業生も医師として自信を持って仕事ができるだろう。そして、本学の学生にとっても良い目標ができただろう。」としみじみと語っておられました。私は、このことが厳しくも暖かく見守る小野寺先生らしく、非常に印象的であったため、今でもその時のことを鮮明に覚えております。

小野寺先生は御退官後も全国各地で開催される学会や研究会に良く出席され、私ども医局員の発表をじっと見守って下さっておられました。急逝される1週間前の8月29日にも、当教室の川辺君の発表もあった札幌で行われましたセミナーに出席されました。その際、先生とお会いしたのが、私にとって最後となってしまいました。

この紙面では先生との思い出を語り尽くせませんが、長年にわたる先生の御指導、御鞭撻に深く感謝するとともに、ここに謹んで先生の御冥福をお祈りいたします。
 （内科学第一講座 助教授）